追手門学院大学教育研究所紀要
第23号　2005年３月　pp. 46-55

授業評価アンケートに対する学生からの意見

経営学部経営学科助教授　辻　　幸恵

１．はじめに

本学では春学期と秋学期の年２回，授業に対する評価をアンケート形式で学生（その授業の受講生）を対象に実施している。各学部が自己評価委員を有し，授業をよりよくするための工夫について考えられている。もちろん，授業内容は各教員の工夫の範疇ではあるが，大学全体としての授業内容の向上をはかるためにはアンケートも学生の意見を知る上では有効な手段であろう。

本報告では，経営学部の学生たちにグループインタビューをこころみた。対象は２回生と３回生である。全体でインタビューに参加したのは42人であった。実施時期は2004年12月であった。本報告には以下の制約がある。

①すべての項目ごとに意見をまとめたわけではない。ある項目についてのみの意見である。

②経営学部の学生で２回生と３回生である。

③42人という少人数での意見である。

よって，すべての学生の意見を代表しているわけでもない。ある特定の学生たちの考え方や評価ではあるが，こういう意見もあるのだということを知り，評価を考える糸口とすることが本報告の目的である。

２．方法

グループインタビューを実施した。実施時間は60分間で，ゼミや友人という顔見知りの学生たちを集めて実施した。場所は研究棟５階の辻研究室である。最大人数のグループが８名で，最小人数のグループは４名であった。アンケート項目を見ながら，特に問題にしたいところを重点的に話し合ってもらった。記述は学生言葉のままで記述をした。わかりにくい用語は（　）に説明を加えた。なお，本報告の目的は，ある特定個人や科目を対象にしているわけではないので，ここでの掲載には以下の基準を設けた。

①学生の個人名はアルファベットに置き換える。

②特定の教員名あるいは科目名がある部分は掲載しない。

③教員や科目が特定されそうな特別な記述は極力省く。
④学生用語はなるべくそのままの掲載をする。

結果，アンケートに実施の是非：２グループ，教員の声（ボリューム）：１グループ，資料配布の件：１グループ，私語の注意：１グループ，シラバスについて：１グループ，質疑応答について：１グループの内容となった。以下に７つのに内容を記す。その後にそれぞれ簡単なまとめをキーワード的に付した。

３．グループインタビュー結果・アンケートに対する意見

①３回生ゼミ生８名―アンケート実施の是非―

ここでは実施する意義のことを話しあった。

Ｓ：まったく意味がないように思います。なぜならば，その意見が次の学期に反映されている先生が少ないように思うからです。何も改善されないならやらなくてよいでしょう。

Ｈ：しかし，現実に反省して，次回にいかしてくれる先生がいるのも事実です。

Ｓ：それが，学生にとって良い方向とばかりではないから困る。たとえば，ある非常勤の先生が春学期は小テストをして毎回採点をしてくれていたのに，秋学期はやめるという。いきさつは，春の最後の授業にどやどやと見たこともない学生たちが６～７人くらい入ってきて，「えー毎回，試験してたの。うっとうしい。そんなの試験１回で充分や」などと騒いでいた。たぶんそいつらが評価の折に配られた要望をかく欄に書いたのだと思う。だから秋学期にその先生が君たちの意見にそって，小テストはやめると言い出した。毎回50人程度の出席で，６人か７人が書けば数字からは１割以上の人数かもしれない。しかし，あきらかにそういうふうに書く学生は普段，さぼっている学生だ。その先生の授業は高度だから，とてもじゃないが，１回の試験で60点をとれるものではない。毎回，小テストでチェックをしてもらって，みんなが出来ていなかった問題を次回におさらいしてもらうから理解ができる。結論としては，そんなふうにさぼったりする学生の意見には惑わされないでほしいです。最後にアンケートをするのがおかしいです。

Ｋ：賛成です。授業の最後の方はテストに関する情報がほしい学生が多くなって，いつもよりもどの授業も騒がしい。いつももっと静かなのにその時だけきて，自分らが騒いでいるくせに，授業がうるさいという学生もいる。わざわざ最後にする意味はないと思います。

Ｓ：だいたい，授業中，注意をしてくれない先生が悪いというのはおかしい。この項目です。騒いでいる学生が馬鹿なのだから。その項目がアンケートの中にあるのが不思議だ。

Ｔ：それでもおとなしい先生に対しては，なめた態度の学生もいるから。学生が学生に注意するのはしにくい面がある。先生でないと注意はできない。

Ｏ：最終日にしないということは賛成です。最終日はこちらも先生に用事があったりして，気持ち的に余裕がないのに，アンケートに答えるというのはどうでしょう。授業評価に対するアンケ

ートに対して，Ｓは意味がないと言ってましたが，他の者はどう思いますか？
Ｋ：意味がないとまではいいません。しかし，さっきもＳが言ってましたように，授業中に注意してくれるとかしないとか，アンケート項目のレベルが低いと思います。他にも声が小さいとか，それらは，先生に授業中に「すみませんが，マイクを使って下さい」と頼めばすむことでアンケートにわざわざ答えるような話ではない。この項目は次回からいらないのではないでしょうか。
Ｗ：学生から先生には言いづらいです。私は小さい声の先生の時は前の方に座ります。
Ｏ：先生が気が付かないからおかしいと思います。だから，そういう項目で，先生自身に気がついてもらうのではないでしょうか？もっと授業がおもしろくなる工夫をしてほしいです。
Ｔ：それはそうですが，もっと授業を改善するようなアンケートがよいです。たとえば，ある科目なのですが，非常に実例を多く紹介してくれるのですが，それがいつもコピーなのです。それよりも，ビデオか映像で何か図示してくれた方が見やすいし，先生もコピーの手間がいらないと思います。視聴覚教室は限りがあるかもしれませんが，そういう科目は，視聴覚の教室を使用してほしいです。機械操作はＴＡに頼んだりできると思いますが。
Ｗ：このアンケート結果は先生方に配布されると思いますが，本当に改善されていくものでしょうか？また，公平な態度で次の学期をむかえられるものでしょうか？
Ｓ：私もそう思います。春と秋がまったく別科目ならともかく，多くの場合，１，２というように続きになっています。多くの学生は春と秋と両方とりますから，春にやばいこと（よくないこと，都合の悪いこと）を書けないと思います。特に人数が少ない科目は誰が書いたかわかると思います。先生の気分だけを悪くしても学生にデメリットだけだと思います。
Ｋ：それはそうです。不完全なセメスターの弊害でしょう。
　ここまでの話をまとめると以下のようになる。
実施の是非→このままでは意味がない→先生が改善していない
項目について→教室などの設備面でカバーできる話やマイクなど授業中に言えばすむことを項目にしている。
不信感について→先生が不快に思うのではないか。記述者が少人数なら特定できる。
改善点→完全なセメスターが望ましい。項目の改善，実施時期の改善をしてほしい。

②２回生友人６名―アンケート実施の是非―
ここでは実施する意義のことを話しあった。
Ｉ：あまり実施に対して意味がないように思います。同じことを各科目で聞かれると，うんざりします。また，好きな先生にはみんな点数が甘く，嫌いな先生にはすべて１をつけたりするから，本当の評価になっているのかどうか疑問だからです。先生の人気ランキングみたいです。
Ｍ：私も同じ意見です。授業評価というよりも先生の人物評価になっています。

D：どうしても親しい先生にはオール５とかしてしまいます。そうしてあげたいです。
I：だから正確なアンケートとはいえないように思います。
M：授業を工夫する熱心な先生は声も大きいし，機材も使うと思います。授業をおもしろくわかりやすくしょうと思う先生は身近な例を出してくれます。聞いていておもしろいです。
T：学生に評価されなくても自己反省して改善してほしいです。プロなのですから。
S：もっとひどいのは，言われても改善しない先生です。これが多いように思います。
I：失礼ですが，心から本当に改善する気があるとはとても思えません。
T：去年も黒板のことについて書いたけど，今年もその先生はまったく同じでした。
K：私もそうです。資料について書いたけど，まったく改善されていませんでした。
T：改善をする気がないなら，アンケートは時間の無駄だと思います。
K：文科省向けなら各先生方１科目でいいと思います。ただやっているというなら。
I：そうです。どうせ複数の科目でしても学生の要望は同じですよ。声の小さい人は全部小さいし，私語を注意しない人はどの科目でも注意しないと思いますから。
M：人数が多い先生と少ない先生に不公平じゃないかな。まったく同じ項目でしょ。
D：そうそうこの前，書いてるのをじっと見られていやだった。人数少ないから誰がどうかいたかわかると思う。大人数は気楽にかけます。20人くらいではちょっと。
K：大教室の先生ってたいへんだよね。ふざけてアホなことを書く学生もいるから。
D：特に気弱そうな先生ってかわいそう。むちゃくちゃ書いて遊んでいる人もいるから。
I：先生によってはうちの学生が評価する学生か？と怒る気持ちもわかる気がする。
T：言われても，先生だってなおらないから言う方もばかばかしくて。時間の無駄。
K：きちんと評価できる学生でありたいと思うけど，そうでない学生もいるしね。

ここまでの話をまとめると以下のようになる。

実施の是非→このままでは意味がない→先生が改善していない，評価する学生側の問題
項目について→大人数と少人数の項目が同じなのは不公平ではないか。
不信感について→先生の好悪によって評価し，人物評価になっている
改善点→大人数と少人数との区別，１人の先生が１科目でよい

③３回生ゼミ生７名―教員の声について―

一般的には，授業計画（講義計画）というものは，その学問体系によって異なっていると考えられる。しかし教員に期待されていることは，その担当科目の授業において，どれくらい準備をしているのか，あるいはどのくらい工夫をされているのかということである。

大人数クラスと少人数クラスの授業体系をダイレクトに比較することは無理である。それぞれに配慮は必要であるが，人数によっても教える側のテクニックが異なっている。出席確認におい

ても20人の確認と400人の確認では労力も時間もちがうはずである。

ここでは評価基準の中に教員の声の大きさを問う項目があるが，小さい声の先生はマイクを使うべきだという学生の意見が多い。以下にその部分に関する具体的な意見を例示する。

M：声が小さい先生に限って，どうしてマイクを使用しないのかわかりません。

S：こちらが欲求したら，そのときだけマイクを使用するがすぐにやめてしまう。

O：マイクをはじめ，機械の使い方がわからないのではないか？

S：新人ならばともかく，何年も追手門学院大学にいるのに，それは勉強不足だ。

O：勉強というよりも，常識というか教員であるという自覚に欠けているように思う。

L：教育者と研究者とは異なるというから，研究者のウエイトが大きいのかもしれない。

O：それは言い訳でしょう。給料をもらっているのだから。教育もしないと。

S：研究者に徹するならば研究所にいけばいい。大学では教育をする義務がある。

L：マイクだけではなく，器材を使えない教員を多すぎるように思う。

S：ビジュアルな授業は本当に少ない。ずっと，聞くだけの授業は苦痛である。

M：しかも聞きづらい小さい声では学習意欲がなくなるのは当たり前である。小さい声だけでなく，声がとおらない先生もいるから。

T：つまり，プロという意識に欠けてるし，パフォーマンスができていない。

O：プレゼンテーションができていないわけだな。良い授業をする気ないのかな。

S：できない教員を許しているというのがわからん。教員格差ではないか。

M：声の小さい先生に限って，黒板の字も小さい。教科書にたよりすぎ。授業がつまらん。

S：だからプレゼンテーションができていない。教員が教育されるべきである。

ここまでの話をまとめると以下のようになる。

マイク→先生が意識していない

授業の工夫について→マイクをはじめ，プレゼンテーション能力に欠ける

改善点→プレゼンテーションをしっかりしてほしい

④２回生友人の集まり７人―資料配布について―

O：資料配布に思うのは，いつも足りない授業がある。本当にいつもいつもだ。

S：後ろに座るとほとんどもらえない例の授業だな。

O：くれと言ったら，友達同士でコピーしなさいというが選択科目で友人がいない。

S：あまったらもったいないと言っていた先生の授業？

O：そうだ。でも，足りないというのはどうかな。春学期からずっと言ってる。

M：もったいないという問題じゃないのに。そこからテスト問題はでるの？

O：春学期は出なかったけど，秋学期はわからない。3分の２はたりない。

M：どうしても枚数がわからんのかな。毎回の人数くらいわかればよいのに。
S：えらい先生だろうが，その数がわからんことが信じられない。
O：後ろに座るような学生はどうせ勉強しないからと言ってるから。
S：どこに座ってもわかる授業でないとなあ。
O：同じ時間過ごしているのにな。前はいやだ。どうしてもいやだな。
M：簡単そうに前にこいというが，なかなかいけないのが学生だからな。
S：学生全員にわかってもらう必要はないと言ってる。
M：それと資料が毎回足りないのとは，別の問題だ。最低限の授業準備だと思うよ。

配付資料については，足らないというのがずいぶん不満なようである。もちろん，あまってばかりでもったいないというのも事実ではあるが，毎回不足しているということを学生たちは問題にしている。

資料のコピーについての不満は大きい。たとえテスト問題に直結していなくても，資料はほしいと思っているのが，今回の話しあいの中でよく理解できた。

ここまでの話をまとめると以下のようになる。

資料→人数分を用意することが最低限の授業準備である。

⑤2回生ゼミ生4人―私語の注意について―
S：私語を注意してくれない先生は非常に多い。注意するのがいやなのかなあ。
N：それは学生が悪いのではないか。本当にずっと話してる学生もいるから。
S：でも，聞こえないからいらいらしてくる。注意はしてほしい。
N：それなら前に座ればいい。前にはいきにくい？
S：だけど，あきらかに大きな声で私語している学生もいる。注意してほしい。
U：先生も注意しにくいんと違うかな。そういう学生ってこわいから。
S：静かにさせるのも授業の工夫だと思う。学生をこわがってたら先生じゃない。
N：俺はそういう学生がおかしいと思う。しゃべりたいなら授業にでるな。
S：そうなんだけど，騒いでる学生は気がつかないから。うるさい自分たちに。
U：先生たちはどう思ってるんだろうか？注意したくないだろうなあ。
S：でも金曜日の1時間目とか木曜日の1時間目は静かだ。どちらも人数多いけど。
U：それは先生が超鬼（とてもこわいという意味）やから，T先生，マジこわいもん。
S：この前先輩，硬直してた。軽くにらむだけでも空気こおったからなあ。
N：まあ，がんとばし（視線をそちらにむける）で黙らせられる先生は少ないから。
S：だからそういう学生は気がついてないから注意は必要だ。
N：この項目があること自体，レベルが低い大学の証拠じゃないかな。

T：この前，女の先生が注意したら，おばんうるさーとか言ってる失礼な学生いたよ。
S：先生に失礼な学生だなあ。先生は怒った？どうした？
T：黙ってムスっとしてはった。出て行けとかもっと言えばよいのに。不機嫌そうだった。
U：先生も不愉快だろうなあ。空気が悪くなる。そう思うと注意はどうかな。
　ここまでの話をまとめると以下のようになる。
私語への注意→してほしいが空気が悪くなるのはいやだ。私語をしている学生が悪い。

⑥２回生ゼミ生６人―シラバスについて―
I：学生としてはシラバスを一応は見ますから，内容が違うと？になります。
W：特に評価をどうするのかが関心事項です。
E：書いてほしいですし，最初の授業で言ってほしいです。
I：シラバスと授業の内容が多少ずれていても不満はないですから，この項目は必要でしょうか？だって，計画をたててるときと授業の日は時間的な差があるから。
E：私たちがシラバスで知りたいのは，おおまかな話の流れとやはり評価方法です。
T：方法が異なれば，最初に言ってくれてもいいけど。
O：とにかく最後でどんでん返しは困るのです。いきなり出席を見るとか。見ないとか。
T：逆もいやです。出席カード配布しておきながら，最後に出席は関係ないなんていわれると今までのカードは何だったの？と疑いたくなるから。
O：おためし期間に出席とるのはいやだな。まだ決めてないから。
E：でもある先生は，最初から授業してたよ。本を持ってない人に出て行けといった。
A：シラバスと同じでなくてもいいけど，誇大広告みたいなのは困る。期待はずれになる。
W：内容はいいけど，授業が下手な先生もいる。もっとレベルの高い良い授業を希望する。
A：とにかく，授業の予告はしっかり守ってほしい。
　ここまでの話をまとめると以下のようになる。
シラバス→内容はずれてもよいが，評価の点は正確に書いて守ってほしい
授業について→最初の授業で異なるところは修正して，評価基準を示してほしい
改善点→必ず評価の方法を明確にして，途中での評価変更はやめてほしい

⑦３回生友人の集まり４人―質疑応答について―
Y：先生によっては質問を無視する人もいる。わからない人が悪くなってしまいます。
H：特に答えが１つになるような計算問題とかで質問しても，答えてくれない。
Y：勉強して下さいだけだからな。わからないから聞いているのに。
A：字が汚いからレポートを受け取らないとか，質問に答えないとかいうのはおかしい。

O：授業の邪魔だから後でと言っておいて，そのままの先生もいる。
H：質問されたくないのかなあ。どうしても質問はあると思うのですが。
O：自分もわからないんじゃないの。特に簿記とか法律は答えが１つだから，知らないと恥だと思うのかもしれない。もちろん専門学校の問題を聞いて答えてほしいという学生もいてあきれたけど。ＴＡＣの問題集を持ってきてたから。持ってくる学生も私はどうかなという気はしたけれど，事実，そういうのってテクニック的に解くから。理論と違うと思う。
Y：常識の範囲の中で，その日の授業に関することはやはり誠実に答えてほしいな。
H：一生懸命答えてくれる先生もいるんだけどなあ。そういうのって活気があるけど。
A：質問項目にこんな普通のことがあるのが信じられないけど，答えない先生が多いから。
H：質問ない授業も多いけどね。先生が勝手に話ししてつまらない授業。
A：質問する気にならない授業のことね。多いからなあ。先生だけ話す授業が。
Y：それはいいけど，やはり試験に直結するような質問には答えるべきだと思う。
H：なんかすごく普通のことなんだけどね。質問する，それに答えるなんて。
O：高校の時は普通に職員室に行って，質問とかしてたけど，研究室は行きにくいなあ。
Y：ものすごく行きにくいね。特に５号館８階は別世界だ。
A：ある先生なんて，いろいろ教えてくれて本までもらっちゃった。親切な先生だ。
H：個人的に聞きに行くと親切かもしれない。
O：それでも教室で，その場で質問には答えてほしいなあ。よい授業してほしい。

ここまでの話をまとめると以下のようになる。
質疑応答→授業内での回答がのぞましい。質問には教室で回答してほしい。

4．考察

グループインタビューの中で「良い授業」というキーワードがあった。そこで『大学授業の研究』片岡徳雄・喜多村和之編，玉川大学出版部1992年第２刷 p46-p47に良い授業は何なのかという分析があるので，以下にまとめた。よい授業の特性について尋ねた27個の質問項目を使用して因子分析をおこなっている。対象は学生と教員である。「すべての授業」，「一般教育の授業」，「専門教育の授業」の３つの授業パターンに分類して，それぞれに対して，因子分析を用いて第４因子までを考察の対象としている。ここでは「すべての授業」と「専門教育の授業」をまとめた。

「すべての授業」において，第１因子には「学生への配慮」が学生にも教員にも挙げられている。第２因子も両者同様に「学習内容の個性化」が挙げられている。第３因子になると，学生は「学習内容の標準化」を挙げ，教員は「集団過程」となった。第４因子には学生は「学習への動機づけ」を挙げ，教員は「課題提出」となり第３因子と第４因子は学生と教員間ではことなった因子が抽出された。

「専門教育の授業」は第１因子から学生と教員の意見が分かれた。学生は第１因子には「学生へ配慮」をあげているが，教員は「学生への働きかけ」を挙げた。第２因子では学生は「学習の動機づけ」を挙げ，教員は「学習内容の個性化」を挙げた。第３因子においては学生は「学習内容の個性化」を挙げ，教員は「学生への配慮」を挙げた。第４因子においては学生は「学習内容の標準化」を挙げ，教員は「講義計画」を挙げた。

ここから考えられることは，学生にとっては良い教育の第１因子に「学生への配慮」を挙げたことである。教員は学生への働きかけや，講義計画が挙げられており，学生との視点の異なりがある。学生への配慮という要因の中には，具体的な質問項目として，「学生の顔と名前を覚える」「講義ごとに出席をとる」「休む学生が少ない」である。学習内容の個性化については，「日常の問題を講義する」「人生観や社会観を語る」「冗談をいう」などが設置されている。日常の問題を講義するということは身近な話題からの出発である。学生たちにとっては，授業をより身近なものに感じるためには具体例の方が理解しやすいということであろう。

また，教師のパフォーマンスについての意見もあったが，パフォーマンスの構成要素は言語表現，タイム＆タイミング，モノのよる自己表現，色彩，空間の使い方，身体表現，表情（アイコンタクトスマイル），周辺言語からなる（注１）。大学の教員に必要なものはこの中のすべてではないかもしれない。しかしながら，モノのよる自己表現などは機材を使用してほしいやマイクをつかってほしいという要望につながる事柄になりうるであろう。また，学生たちの求めているおもしろい授業というのは，身近な例を出したり，活性化した授業のことであると推察する。たとえば学生参加は多人数教室でも可能であるという。三方向授業（注２）やグループ課題の活用（注３）をあげて授業の組み立てや流れを説明し，その上で活性化する方法も例示されている。学生の多くは，視覚にうったえる教材を求めたりしているが，それはテレビ，ＤＶＤの影響かもしれない。じっくりと耳を傾けるという訓練の不足なのかもしれない。

最後に，本報告では，少しでも多くの学生の声を紹介したいと思い，７つのグループインタビューの抜粋となった。本来であれば，ひとつひとつのグループが述べたことをすべて記載した方がより理解できたかもしれない。ここではあくまでこのようなことを学生は意見としてもっているという紹介にすぎない。よって，今後の課題としては，それらを具体的に改善していくことができるのか，また，アンケートに回答している学生たち自身の問題点（人物の好き，嫌いになっている点など）をどのように，改善していけるのかということであると考える。少なくとも，時期については2004年度の秋学期は講義の最終日ではなく，12月の２週間という時期に変更され，実施期間にも幅があった。これは学生たちの意見の中にもあったように，時期の改善が現実化されたことである。今後も改善できうることへの挑戦と教員の授業に対する工夫が学生たちから期待されているであろう。

注釈

注１：『教師のパフォーマンス学入門』佐藤綾子，金子書房2002年３刷 p.46表３を引用。

注２：三方向授業とは，教員→学生，学生→教員，学生→学生の相互の情報の流れをいう。『大学授業を活性化する方法』杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編，玉川大学出版部2004年，p29を参考。

注３：同掲書 p33を参考。

参考文献

片岡徳雄・喜多村和之編『大学授業の研究』玉川大学出版部1992年２刷

児玉善仁・別府昭郎・川島啓二編『大学の指導法―学生の自己発見のために』東信堂2004年

佐藤綾子『教師のパフォーマンス学入門』金子書房2002年３刷

杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部2004年

S.G. クランツ，蓮井敏訳『大学授業の心得』玉川大学出版部1998年